目次

はじめに　7

第一章　東京での「おまん」の衝撃　13

京都の若い女性からの切実な願い／新しいコンセプト、さまざまな依頼者とともに／全国アホ・バカ分布図から四半世紀／若き女性研究者・石上阿希氏への手紙／研究費は三〇〇〇万円／「女陰」方言のきれいな円／言葉の伝播速度について／『日葡辞書』の女陰語／中学時代の性への関心／御所ことば（女房詞）としての「ボボ」／御所ことばと天皇

第二章　「虎屋」の饅頭へのあこがれ　55

女児たちの「マンジュー」／分かりにくい『日葡辞書』の記述／あこがれの虎屋の饅頭／限りない貴重品としての「饅頭」／大人の女たちの「マンジュー」へ／江戸社会の「マンジュー」／かわいくて優雅な「オマンコ」／「マンジュー」から「オマンコ」までの道程／女房詞の研究者の分析と天才作家の直観／「オマンコ」のたどった淫乱な運命／「ソソ」と「ヘヘ」も婦女子語か

第三章 「チャンベ」「オメコ」らの愛すべき素性 93
「チャンベ」「チャンペ」の愛らしさ／「兵衛」の栄えた時代／茶の湯と女陰／二四歳のお茶の日々／「ダンベ」は「団兵衛」／入りわたり鼻音「ベ」音の変化／ジョアン・ロドリゲスと女陰名／「チャンベ」は本当に「茶兵衛」から来たか／「メメ」「メンチョ」「オメコ」の女らしさ

第四章 女性の心に生きる「オソソ」 121
婦人語「オソソ」が使われていたころ／谷崎潤一郎と「オソソ」／ワレメちゃん論争／増えゆく女性のみに課せられたタブー／『魏志倭人伝』の伝統を受け継ぐ『潮騒』の女たち／女陰名＋「する」だけが「性交する」ではない／「オソソ」って上品／饅頭は、一個か二個か／たった一人の「オソソ」の反乱／「オマタ」のやむなき誕生／「デリケートゾーン」の台頭／「バルバ」と呼びなさいとの小学教育／京の一〇〇〇年にわたる試行錯誤

第五章 琉球に旅した『古事記』の言葉 167
『古事記』『日本書紀』と琉球の言葉／琉球語と本土祖語が分離した時期／古代の「パ行」が保存される先島諸島

第六章 「チンポ」にたどり着くまで 179
男根語の試行錯誤／「ヘノコ」は、何の子？／「ダンベ」の変身と伝播のあり方／琉球の「タニ」の出自／「チンボ」を最初に記録した近松門左衛門／林美一氏の「チンポは上方語」

第七章 「マラ」と南方熊楠 197
「マラ」は梵語から来たという説は正しいか？／「マラ」は、赤ちゃんにも使う言葉／「最澄」「空海」への冒瀆／「マラ」の分布の謎／『名語記』の「末裸」はチャーミング／近世随筆をスキャンしていた人物／『翻訳名義集』が巻き起こした旋風／近世初期に「魔羅」はあったか？／「羅切」は「魔羅を切る」か？／「僧の隠語」とゴータマ・シッダールタ／権威の国民辞書『広辞苑』の落日／知の巨人南方熊楠、咆哮す／南方熊楠かく語りき／昭和天皇が愛した熊楠

第八章 女陰語の将来 279
石上阿希さんに会う／春画と日本の女性／童謡・春歌の「オマンコ」

第九章　今までの「おまんこ」研究　289
日本言語学界と「オマンコ」／白鳥庫吉の「オマンコ」語源説／『日本国語大辞典』第二版の「語源説」の特質／澁谷知美氏による「まんこ」語源説の分析／もし白鳥庫吉が「女陰　全国分布図」を解読していたら

第十章　「まん」を生きる人生　305
いい名前だなぁ／依頼者は京のヴィーナス

結びの章　花咲く京の春の大団円　325
河村能舞台にて／秘すれば花なり／御所夢幻の世界へと

おわりに　346

出典および主要参考文献　358

# はじめに

この本は、一九九五年にテレビ番組『探偵！ナイトスクープ』に寄せられた二四歳の京都の独身女性からの依頼に対して、普段のように番組の中で「探偵」を派遣して応えるのではなく、この番組を独自のアイデアで企画して、今もなおプロデューサーの一角を占めている私、松本修自身が、こうして文章の形で、全力を込め、正面切って応えようとするものです。

京都の母が送ってくれたお饅頭がなくなったので、東京・新宿のオフィスで、

「私の おまん、どこにいったか知りませんか？」と、たずねました。

「私の おまん がないんです」

「おまえ、昼間っから何言ってんだ！」

職場では大騒ぎ。京都では「おまん」は、主に女性が使う、キレイで上品な言葉なのに。

もうこんな、恥ずかしい思いをするのは嫌です。

「全国アホ・バカ分布図」みたいに、その言葉の全国方言分布図を作ってもらえませんか。

そういった趣旨の依頼でした。この女陰を意味する言葉は、依頼者自身はまったく知らなかったのでしょうが、じつは「放送禁止用語」です。日本国憲法で「表現の自由」が保障されているとはいうものの、テレビやラジオは、その公共性を鑑み、「自主規制」している代表的な言葉のひとつなのです。依頼者には申し訳ありませんが、テレビ番組では絶対に採用できません。しかし、本でなら応えられる。テレビでできないことは、本でやってみせよう。

依頼から二三年も経って、ようやく私は、長年の宿願に決着をつけるために、ついに腰を上げることにしました。「オマンコ」、さらにこれと対をなす「チンポ」という言葉の謎は、いまだどの言語学者によっても、明らかにされていません。この謎の闇は深遠でした。女陰・男根語の世界こそ、日本における残された数少ない、たぶん最大の、人文科学の秘境だったのです。その未踏のジャングルに、私はたったひとり足を踏み入れることになりました。

女陰語は、日本で、どのように分布しているのか。その分布は、どのようにして成立したのか？　それがこの本の第一番のテーマです。

しかし、そのことと同様、さらに興味深いのは、私には次のようなことに思えます。

女陰語は、今、なぜ大っぴらに口に出せないのだろうか？

男根語である「オチンチン」「チンポコ」「チンポ」などならば、テレビでも、ネットでも、ときにかわいらしく、愛らしくさえある言葉として、日常的に口に出すことができるというのに……。もちろん、こうした男根語は、放送禁止用語ではありません。しかし、女陰語は、それが地方語であったとしても、絶対的にタブーである。どうして男女でこんな差があるのでしょうか。これこそ、男女差別の典型ではないでしょうか。

女陰語とは、それほどまでに神聖にして侵すべからざる言葉だとみなされてきたからでしょうか。いや、けっしてそうではないでしょう。それとはまったく逆に、この世で最もいやらしく、下品の極みの言葉とみなされ、何人（なんぴと）であれ、いっさい世間的に関わるべからざる言葉とみなされているからなのではないでしょうか。おそらく、これが実態でしょう。

実際女陰は女性の魅力的な身体美の一部を構成するものであるにもかかわらず、それを表す語はいつしか忌まわしきタブーの言葉とされ、口に出すのさえ憚（はばか）られる、「卑猥」きわまりない最低の地位にまで落とされてしまったのです。

そんな悲惨な運命を生きている日本の女陰語の代表、「オマンコ」とはいったい何なのでしょうか？　そして、その対でありながら、いともかわいく、愛すべき名称である「チンポ」「オチンチン」とは、いったい何なのか？　それぞれどういうルーツを持ち、どういう運命を

たどって今に至った言葉なのでしょうか？

特に、気になるのは「オマンコ」を始めとする女陰語です。それらは、日本では最初から「はしたない」「汚い」「下品な」言葉とみなされてきたのでしょうか？

昨今、性教育の重要さが言われている中にあって、残念ながらこんな大切なことが、今まで小・中学校や高校、大学など教育の現場で、歴史上一度も、教えられることがなかったのです。仮に教えたいと思う奇特な先生が現れたとしても、先人の言語学者の中で、この言葉をまともに研究対象とした学者は、日本にただのひとりも存在していませんでした。

この本では、日本の歴史の中での「オマンコ」「チンポ」、さらに今は地方語として生きる、かつての中央語（京のことば）で女陰を意味する「ホト」「ダンベ」「マンジュー」「ヘヘ」「ボボ」「チャンベ」「オメコ」「オソソ」、あるいは男根を意味する「ヘノコ」「シジ」「マラ」「カモ」「チンボー」など、さまざまな語の、目まぐるしく京の都で繰り返された、まさに「栄枯盛衰の歴史」の跡を、全国方言分布図を解読することによって子細にたどります。そして、それぞれの言葉のルーツを明らかにし、そういった言語表現のアイデアを敢えて思いつき、また喜んでこれを受容してきた日本人の、「まっとうで美しき、よき心のさま」を解明しようと試みるものです。

女陰・男根語についての「言語地理学」（方言地理学ともいう）に則（のっと）った、本格的な人文科

学的な研究は、日本という国家の開闢以来二〇〇〇年近く、これが初の試みとなるでしょう。女陰・男根という素材を通して、日本人の心の真実の姿を浮かび上がらせることをテーマとした本を読んだ人が、かつて日本にいたでしょうか。いや、間違いなく皆無であったでしょう。

これはテレビで実現することが叶わなかった、もうひとつの『探偵！ナイトスクープ』と言えるかも知れません。ときに高度に知的な内容を扱うこともありますが、これでどうや！　というぐらい分かりやすく書くことに努めますから、ご安心下さい。それがテレビマンとして長年、生きてきた私の誇りです。明るい笑いもたっぷり届けましょう。

私は執筆しつつ、女陰・男根語に込められた情愛の深さに、胸を打たれずにおれませんでした。気づけば筆を止め、幼時を思い出しながら、ふとひとり目頭を押さえることもありました。そして両親や祖母、育ててくれた周りのすべての人々への感謝と、日本に生まれたことの、誇らしさと歓びを感じ続けました。

そんな静かな、深い愛に満ちあふれた書を、今、心を込めてあなたに届けます。

新書でありながら、三五〇ページを超える長旅です。でもその旅は、楽しく愉快で、快適であることを約束いたしましょう。その旅の途中で、あなたもまた、日本人であることの誇りと歓びを感じてもらえたら、どんなに嬉しいことでしょう。

湧き上がる歓びに心の奥底まで浸りたくなったら、読後に、好きなお酒でも用意して下さい。リッチな人には、たとえばドイツの上質な貴腐ワイン、トロッケン・ベーレン・アウスレーゼを。慎ましき民には、サトウキビで造られた、西インド諸島の安酒ラムのコーラ割りを。どちらも、等し並みに至福の時間をもたらしてくれるでしょう。

私は少しだけ張り込んで、「ポー」「ホー」「ホーミ」など、『万葉集』『古事記』以前、あるいは日本統一以前からの女陰の古語「ホト」をルーツとする言葉の彌栄（いやさか）う、琉球の二〇年ものの泡盛の古酒（クース）を戸棚から取り出して、大切にいただくことにしましょう。

子供の飲酒は許されていません。中高生の若き少年少女は、お酒のかわりに、味わってほしいものがあります。上質の「お茶」と「お饅頭」をです。読めば分かります。

この本を、私はぜひとも初々しい少年少女にも読んでほしいのです。男の子にも読んでほしいけれど、特に、両親や周囲の愛情をいっぱい注ぎ込まれて育ってきた幸福な女の子たちに。女性、そして人間として生きる尊厳を、過去、私たちの尊き祖先がいかに大切にして生きてきたかを知るためにも、ぜひ楽しみながら読んでほしいと思います。

さて、船出の時間が来ました。きっと男女それぞれに、生まれて初めて経験する、とてつもなくエキサイティングで楽しい、大冒険旅行となることでしょう。

ボン・ボヤージュ！

# 第一章　東京での「おまん」の衝撃

## 京都の若い女性からの切実な願い

一九九五年五月初旬のことです。ユニークな内容が書かれた一通の手書きの依頼文が、『探偵！ナイトスクープ』に寄せられました。そのころはまだパソコンが普及していませんでしたから、依頼は必ず、はがきか手紙で寄せられました。

手紙をくれたのは、京都市内に住む二四歳の女子学生でした。地元京都で学生になる前に、東京で働いていた時期があったようです。この依頼はまさにこの本のテーマ、なんと「女陰」の名称の全国方言分布図を作成してほしいと求める内容だったのです。こんなお願いが、若い女性から、しかも大真面目な文章で寄せられてくるとは、夢にも思っていませんでした。

私たちに依頼文が届いたのは、一九九一年五月二四日に「全国アホ・バカ分布図の完成」編を放送してから、ちょうど四年が経ったころでした。この放送をきっかけに、私が「アホ・バカ方言」の研究を仕事の合間に始め、『全国アホ・バカ分布考』を太田出版から上梓したのは、一九九三年七月でした。この女性はそれらを踏まえた上で、依頼文をしたためてくれたのです。

人は一生に一度は、感動的な名文を残す機会があります。絶妙な年齢のときに、誰にもできない珍しい体験をして、それを素直な心で、正直に文章に綴った場合です。この依頼文こそ、まさにそれに当てはまるでしょう。

とても真剣にして、真面目で、それだけに滑稽に読むことのできる文章です。事実の重みは、奇跡の文章を生むものだと思います。ぜひじっくりと味わってみて下さい。

探偵のみなさん、こんばんは。いつも楽しく拝見しています。

今日はとてもとても恥ずかしかった話をしますが、くれぐれも、本人はマジメなんです。ナイトスクープが全国で放映されるようになった今、ぜひみなさんで考えていただきたい重要なことがあるのです。ぜったい、ぜったいマジメにきいて下さい。

あれは三年前、東京で働いていた時のことです。母から「会社のみなさんでどうぞ」と、京都のおみやげを送ってもらった時に事件は起こりました。母は京都でおいしくて有名なおまんじゅうを送ってくれました。そして四、五〇人いた社員全員に無事おみやげを配り終え、さて、私もそのおまんじゅうをいただこうと思って机の上を見たら、なぜか見当たりません。どうしたことかと思い、明るい私は、大きな声でまわりの人に、

「私の[おまん]、どこにいったか知りませんか?」

とたずねました。

私は京都生まれの京都育ち、当たり前のようにおまんじゅうのことは「おまん」と言います。すると上司が、とてもまっ赤な顔をして、

「おまえ、今何と言った？」
と、慌てて聞き返したので、きょとんとした私は、
「いや、私の[おまん]がないんです」
と、何も考えずに答えました。するとまわりの人たちが大きな声で、
「おまえ、昼間っから何言ってんだ！」
と、大笑い。職場では、もう大騒ぎでした。私はどれぐらい恥ずかしかったことか。
京都では、看板にでも「生八ツ橋のおまん」と堂々と書いてありますし、女性はもちろんのこと、言葉のキレイな男性なら、何のためらいもなく「おまん」を使います。関西なら、誰もがふつうに聞いてくれます。私たち京都の人には、「おまん」は丁寧で、美しい言葉でありますし、変な目で見られるのはとても困ります。
それからあと、飛彈高山のおみやげで「さるぼぼ」というお守りがあります。それも私が前に、
「あ、さるぼぼちゃんや」
と言ったら鹿児島出身の彼が、
「えっ？」
と顔をまっ赤にさせ、言葉も出せないくらいになりました。年頃の娘でもありますし、

とても恥ずかしい思いをしました。

私はそれ以来、その二つの言葉を言うのが、ものすごく恥ずかしくなりました。そこで全国で、どの地域でどのように使い方がタブーになるのか、「全国アホ・バカ分布図」のように分かるといいのですが。

どうか京都の人たちが「変態」と思われないよう、よく調べていただけませんか。よろしくお願いします。

なんという強烈な、かつ面白い体験記であり、依頼文でもあることでしょう。

この依頼文は、当然のことながら即座に「不採用」となりました。先述のように、女陰語の放送はテレビでは自主規制の対象になっています。放送すること自体がタブーなのです。一九九二年に集計をまとめた**「女陰　全国分布図」**は、じつはこの依頼のはるか三年前に出来上がっていました。テレビでは無理ですが、しかし本にはすることができる。いつか本にまとめたときに、いちばんに彼女に届けよう。そう思って、私はこの依頼文を処分せずに、大切に残しておいたのです。

それが日の目を見るときが、やっとやってきました。

**全国マン・チン分布考**

**松本修・著**

発　行：集英社インターナショナル（発売：集英社）
定　価：本体 860 円 ＋ 税
発売日：2018 年 10 月 5 日
ＩＳＢＮ：978-4-7976-8030-0

ネット書店でのご予約・ご注文は こちらにどうぞ！